東京天台

平成十九年
秋彼岸号

発行所
天台宗東京教区
〒107-0062 東京都港区南青山1-3-22
TEL.03-5785-3481
杜多道雄

天台の法燈を継ぐ新お座主さま

傳燈相承式

去る四月二十六日、半田孝淳天台座主猊下の傳燈相承式が行われた。

先の座主渡辺恵進猊下がご譲職の後、第二百五十六世の天台座主に任じられた半田座主猊下は、古儀に則り代々の座主の御名の連なる傳燈相承譜にご署名され宗祖より続く法燈を継承された。式後の祝賀会には、仏教者、諸宗教など、各界より八百名の来賓が新座主の就任を祝った。

半田孝淳新天台座主猊下

伝燈相承式

半田座主猊下

新しいお座主半田猊下は長野県上田市別所のお生まれで、北向観音で知られる当地常楽寺のご住職を務められた。この他に京都五箇室門跡の一つ曼殊院門跡の門主をお務めになった他、宗議会議員、天台宗教学部長他、宗外においても宗教サミット等において要職を歴任され、天台宗、日本仏教界の発展、世界平和にご尽力されてきた。

また東京の檀信徒にとっては、先の授戒会での伝戒和尚のお姿が記憶に新しい。

お座主さまのお姿とは

お座主さまは総本山延暦寺での法要や、地方での大法要にて大導師をお務めになる。この他にも機に応じ、我々の進むべき方向をお示しになる。我々天台宗徒にとってお座主さまの「お姿」は敬して止まないものなのである。

しかし千二百年前の開宗以来、天台の高僧はもちろん各宗の宗祖をも輩出してきた天台の座主とは、単に日本天台宗の最高位というだけでなく仏教界の代表なのである。そのお立場はキリスト教におけるローマ法王と並ぶものであり、世界の宗教者の第一人者としての役割を担われているのだ。

毎年行われる比叡山宗教サミットでは、会の中心となって行事を成功へとお導きになり、これまでも多くの成果を残されている。宗教間の違いを超え、世界へ「平和の祈り」というメッセージをお伝え続けて下さっているのだ。

これらはつまり千二百年前に「忘己利他」の精神をお示しになった宗祖大師最澄さまの現代での「お姿」とも言えるのではないだろうか。

この「お姿」を拝して、これからも天台僧侶となるものは必ずお座主さまから戒律を受ける。こうして釈尊から宗祖大師へと繋がる法脈をお座主さまより引継ぎ、僧侶として日本はもちろん世界へまで仏教を広める仏弟子が生まれるのである。

比叡山宗教サミットでの新座主（H19.8.4.）

生活に生きる仏教

遭い遇うこと難し

お彼岸の時期は、多くの方がお墓参りにみえ、お寺が賑やかになります。墓地はきれいに掃除され、花が飾られ、お線香の煙が流れ、あちらこちらであいさつを交わす光景が見られます。

普段は見かけない若い夫婦も、墓前に香を手向け手を合わせています。おとしよりを気遣いながら、水桶を運ぶ子どもがいます。そこには、これからも守り続けていってもらいたい、大切な心を伝える姿があります。

お墓参りは、ご先祖に出会う機会です。ご先祖とは、自分の親から祖父母、曾祖父母へ、さらに遠い過去へとつながる多くの縁ある方々です。その流れの末裔に自分も位置しています。

私たちは、ものごころついた頃から、親や祖父母、あるいは兄弟や親戚に囲まれて生活しています。誰もそこに選択の余地はありません。もっとハンサムな親から生まれていれば、もっと裕福な家に生まれていれば・・・若い頃に夢想した方も多いことでしょう。

しかし、この親のもとに生まれてこなければ、今の自分は存在しないということも事実です。この親がいてこそ自分がいるという、逃れられない絆があるのです。

そして、その子もいつかは親となり、自分の子の豊かな成長を願い、保護し育成していくことになります。この時、はじめて親の立場を知ることにもなります。親子の間には、理屈を超えた不可思議な縁があるのです。

すべての生命は、親子の縦の縁の繰り返しの中に、はぐくまれ展開してきたのです。

さて、仏教では、仏様のこの上ない尊い教えは、無限の時を継ても、めぐり合うことは難しいと言われています。

お墓参りの際、自分の親や祖父母、曾祖父母を思うことは、自分がめぐり合い難い多くの縁に生かされてきたことを思うことであり、また無限の時を継て今の自分の生命があることを感謝することにつながります。お墓やお寺を通して、大事にすべきものが見えてくるのではないでしょうか。

ですから、お墓参りの機会に、おじいさんおばあさんの話、昔の苦労した話、楽しかった話をしてあげて下さい。自分が多くの縁に関わり守られてきたことに気づかせてあげてください。この気づきこそ、仏教的な生き方の出発点となります。

お墓が家族の心のふるさと、そうなったら素晴らしいですね。

道標

夕方の私鉄電車でのこと、車内は帰宅途中の人で混んでいたが、乗換駅に着くとかなりの乗客が入れ替わった。その先頭をきって急ぎ足で乗り込んできたご婦人は中年を過ぎて老いの領域に入ったくらいの年齢に見える方であった。立っている人を掻き分けるようにして優先席の前に立つと、座っている若者たちにジロジロと遠慮のない視線を向けた。それは誰の目にも「さあ席を譲りなさい」との要求に見えた。若者たちは本を読んだり、目を閉じたりしてご婦人の行動を全く無視していた。

お釈迦様の説かれた「無財の七施」に、お年寄りや身体の不自由な方に席を譲ることを説いた床座施という教えがある。仏教的に言えば前に立ったお年寄りに若者が席を譲るのは当然のことであるが、これは布施であるから施す側の意思が問題で、その気がない人に布施を要求することは出来ない。このケースでは優先席に座っている若者全員が体調不良とも思えず、当然立たなければならないのだが、座る権利を主張しているように見えたご婦人の行動の方に周囲の目が集まっていた。

ある国では座っている若者の手を引いて無理やりに立たせ、その席に座るご婦人もいると聞く。権利と義務が何事にも優先するお国柄だとそうなるのだろうか、おおらかな仏教思想に満ちている日本では譲り合っていきたいものである。

東京教区の団参は、総本山比叡山の参拝をはじめ全国各地の天台の名刹や名所旧跡を廻り、もう五十年の歴史があります。

数年前、はじめてハワイ団参が行われましたが、今回は沖縄団参を企画しました。

ご承知の通り、秋は台風のため例年よりは遅めの出発予定です。

鹿児島や沖縄には天台宗の寺院は一ヶ寺もありませんが、非法人ながら沖縄県で唯一天台の法燈を継ぎ、教線の進展に尽くしているのが、地蔵院の金城永真師です。

師は、比叡山で修行の後、調布深大寺で昭和六十二年までの三年間実践法儀を学び、故郷具志川に壇信徒も殆どいない中で、独力で一寺を建立し今日まで布教活動にあたってきました。

天台宗開創千二百年行事の一環として、この夏には那覇市で瀬戸内寂聴師の講演会を催したりと、本土とは信仰習俗の異なる中で、一生懸命天台の教えを広めています。

団参ではこの地蔵院で法要、平和を祈ります。

金城住職

教区の壇信徒皆様には、この機縁に沖縄の風光に接し地蔵院の隆昌を願っていただければ誠に幸いです。

他に、世界一といわれる美(ちゅ)ら海水族館や、ひめゆりの塔、首里城などを見学します。

皆さまには是非お誘い合わせご参加下さい。

（申込みは九月末日までに各菩提寺へ）

世界最大の美ら海水族館

ひめゆりの塔

開宗千二百年慶讃 授戒会成功裏に終了

天台宗が公式に一つの宗派として認められてから、平成十八年一月で千二百年になるのを記念して行われました授戒会が無事終了しました。

東京教区では合計千百名近くの壇信徒の方々が授戒されました。

回数と会場の都合で残念ながら授戒されなかった方も多数おられると思いますが、またの機会には是非お受けいただきたいと思います。

お授戒された方はその後、日常生活の心構えなど、どう変わられたでしょうか。

仏舎利(ぶっしゃり)を頭上に頂き、法名を授かった場面を事ある毎に想いながら、どうか三聚浄戒(さんじゅじょうかい)（悪を慎む。善を行う。皆さんのお役に立つ）を保つ生活を進めていただくことを念願いたします。

仏舎利を頂く・浄光寺にて

授戒者数一覧

(1) 平成十五年十月十九日
会場・深大寺　二百九名

(2) 平成十六年十一月二十日
会場・天王寺　百十四名

(3) 平成十七年四月二十三日
会場・知行院　七十五名

(4) 平成十七年五月七日
会場・西光寺　百二十名

(5) 平成十八年六月二十四日
会場・安養寺　百九十八名

(6) 平成十八年十一月十八日
会場・浄光寺　百六十八名

(7) 平成十九年四月二十一日
会場・寛永寺　二百七名

天台の寺めぐり ㉔ 上野公園

輪王寺（両大師）

輪王寺 開山堂

JR上野駅公園口へ出る。ここは、音楽の文化会館、美術館、博物館、動物園、芸術大学と東京の文化の中心で、いつも賑やかだ。

公園口を右へ五分足らずで輪王寺の荘厳な山門の脇に出る。この山門は、もと寛永寺の表門で戊辰戦争彰義隊の戦（上野戦争）でも焼失を免れたもので門扉には今も当時の弾痕が生々しく残っている。

当寺は東京で唯一の門跡寺院である。門跡寺院とは、皇族、貴族が出家して入室した特定の寺格の寺をいう。

正保四年（一六四七）に東叡山（上野）寛永寺に来られた後水尾天皇の第三皇子守澄法親王は、承應三年（一六五四）には正式に東叡山主になられ、翌明暦元年には天台座主となられて、比叡山（延暦寺）、東叡山（寛永寺）、日光山（満願寺）の三山を兼任された。

その守澄法親王に対して輪王寺宮の称号が与えられたのである。

輪王寺というのは宮様個人の称号であって、江戸時代にはまだ輪王寺という名の寺はなかった。戊辰戦争後に最後の輪王寺宮が還俗され、一時輪王寺の称号が途絶えたので、これを惜しんだ東叡山、日光山からの要請により明治十六年（一八八三）に、この両山に輪王寺という名の寺が再興され、また門跡寺院としての再興を許されたのである。

天海大僧正

輪王寺の本堂に当たる開山堂には、東叡山の開山天海大僧正と天海大僧正が尊崇した慈恵大師良源大僧正（元三大師、第十八代天台座主）も合わせて祀られているので一般には両大師と呼ばれている。

戦災を免れたもと寛永寺表門

護國院 谷中大黒天

護國院本堂

両大師を出て芸大の方向へ十分、芸大の角を左へ折れるとすぐ護国院へ着く。

護国院は、寛永二年東叡山開山と同時に東叡山の最初の子院として建立された。

その後、山内に古仏師春日の作といわれる釈迦、文殊、普賢を祀る釈迦堂が建立され護国院は釈迦堂の別当となった。この釈迦堂は、草創期の東叡山第一の大堂で、元禄期に根本中堂が完成するまで東叡山の総本堂の役割を果たした。その後、釈迦堂は焼失、享保七年（一七二四）に再建された釈迦堂が現在の護国院本堂になっている。

谷中七福神巡り

寛永十六年に大阪城落城二十五年に当たって、豊臣、徳川両軍の霊を弔う大法要が釈迦堂で行われ、その功績によって三代将軍家光公より藤原信実卿筆と伝えられる大黒天像が寄贈され、以降護国院大黒天として信仰を集めるようになった。

谷中大黒天

護国院大黒天を含む谷中七福神巡りは江戸で最も古い七福神巡りのひとつとして知られ、現在は上野不忍池の弁才天、谷中長安寺の寿老人、谷中天王寺の毘沙門天、日暮里修性院の布袋尊、日暮里青雲寺の福禄寿を巡拝するものが定着している。

一月一日から十五日の間は七福神画像の版画や朱印帖をもってお詣りする人々で賑わう。